

連載
第74回

福聚山史

文池浦泰憲

大田南畝と「柏木」の地

●役人 大田南畝

門前の「便々館湖鯉鮒狂歌碑」を揮毫した大田南畝（蜀山人）は、寛延二年（一七四九）三月三日、新宿牛込の御徒組屋敷内で、大田吉左衛門正智と利世長男として生まれた。

御徒とは徒歩で従軍する兵士のこと、江戸城の勤番、御成（將軍などの外出）の先陣を交替で勤め、曾祖父の代からその任務を担っていた。南畝は十七歳の時、登用され、將軍の日光社参などに従っている。その後、四十六歳の時、学問吟味（旗本・御家人子弟の学科試験）を首席で及第し、勘定所の支配勘定（財務・民政の担当役所で実務にあたる下級役人）という役職に採用された。その後も取調御用、大阪銅座詰、長崎奉行所詰などで現地に赴任するなど、還暦を過ぎても有能な官吏として働いたという。南畝が勤務の中でまとめた著作が今も多く残されている。

●「蜀山人寓居の跡」

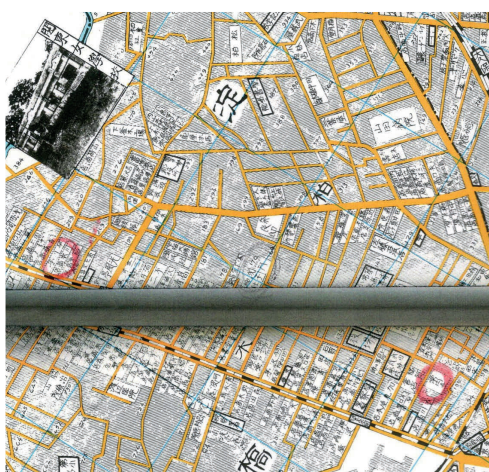
南畝が生まれた牛込組屋敷は「牛込御徒町」（現、新宿区北町・中町・南町）と呼ばれ、南畝はこの中の「中町」に五十六歳まで暮らした。六十一歳から四年間は牛込若松町（大久保）に住み、

七十五歳の生涯のほとんどを新宿で過ごした。

その後、新宿を離れるが、以降もそのつながりは続いていたようで、後世の記述であるが、そのことを記した次の資料がある。

「蜀山人寓居の跡」

大字柏木（字淀橋姿）二百十六番地、川本氏（金太郎）店舗の地は、もと家持土方作右衛門の居宅にして、土方氏は落葉舎山外と號し俳句を嗜み蜀山人に私淑す。文政三年の頃たまたま山人は同家を訪れて遊寓せるよし、かの熊野神社、鎧神社、常圓寺等に献納せる



『淀橋町市街図』（大正14年、『地図で見る新宿区』の移り変わり 淀橋・大久保編）より転載）左側の赤丸が寓居跡、右の赤丸が常圓寺。

詩歌は皆當時の作にて古老は「ねぼけのおぢさん」と呼びたりと語れり。又其の頃土方家は「氷おこし、みぞれおこし」など商ひて、堀の内詣りの客にて繁昌したりと、同家に今も蜀山人揮毫の見事なる店看板を保蔵せり。『東京淀橋誌考』

昭和六年（一九三一）に出版された、この『東京淀橋誌考』という書に、蜀山人（南畝）ゆかりの場所が「大字柏木」にあったことが伝えられている。「柏木」とは、青梅街道の北側、西新宿七、八丁目、北新宿、高田馬場あたりまでの地域である。ちなみに常圓寺のある「成子」は江戸時代は柏木村内の地であった。

記述の住所を基に古地図で場所を探したところ、青梅街道を中野方面に進み、十二社通りが突き当たる近辺のようである。（地図、写真参照）

この寓居は土方作右衛門という人物の家で、作右衛門は落葉舎山外と名乗り俳句を嗜み、南畝に私淑していたようである。文政三年（一八二〇）に訪れた南畝が、熊野神社（西新宿二丁目）、鎧神社（北新宿三丁目）、そして常圓寺に詩歌を献納したという。これらの詩歌は確認できなかったが、熊野神社には大田南畝が揮毫した字の彫られた水鉢が残っており、この頃のものと考えられている。ちなみに常圓寺の碑も、便々館湖鯉鮒が没した翌年（二八一九）に建てられたといわれており、同時期のものである。前回紹介した南畝の漢詩から、南畝と常圓寺には以前から縁

はあったであろうが、こうした柏木の地との縁も、現在残る南畝の足跡の基になっているのかもしれない。

●「柏木」と南畝

南畝は、古希（七十歳）の誕生日直前、勤務で江戸城に登城中に転倒し、自宅で療養を余儀なくされる。

文政四年（一八二一）にまとめられた随筆『奴風』の中で、南畝は「つらつら思えば、老病など見たくでもなく、忌々しきものはあらじ。家内の者には飽きられて、善く取扱う者なし」と自宅に籠らざるを得ない身の上での心境を綴っている。この著作は、主に明和から寛政（一七六四～一八〇一）頃の江戸の名所・遊所のことから狂歌を中心とする当時の文学状況や文人の消息などをまとめた著作であるが、老いを感じつつ、自らの歩みを振り返る時期にあったものとも考えられる。柏木を訪れたという文政三年当時は、まさにこのような時期であり、この頃は神田駿河台に居を構えていたが、南畝にとつて柏木は自身が生まれ育ち、多くの歌を詠んだ思慕の念を満たす場所でもあったのではないだろうか。



南畝が訪れたと思われる場所。現在の青梅街道「成子坂下」交差点付近。